

筋力低下などの症状が存在したと思われる。しかし、精神症状としての無為、自閉、意欲の低下のため、症状を訴えることもなく、また発見を困難にしたのではない。横紋筋融解をきたした段階でも、臨床症状より CPK 高値が重視されて悪性症候群を疑われ、結果的に低カリウム血症の治療が遅れている。

なお、精神分裂病において遺伝的傾向を持つ neuro-muscler disfunction～筋の脆弱性を指摘する研究もあり、本例でも、横紋筋融解症の発展への関与の可能性は否定できない。

グリチルリチン（商品名グリチロン）およびグリチルチリチンを主成分とする甘草を含んだ漢方製剤が、精神科臨床でも多用されているだけに、偽性アルドステロン症という疾患の存在を知っておくことが必要と考えられた。

15) Rapid Cyclers の臨床特徴について (第2報)

中村 秀美	(五日町病院)
藤田 菜生	(県立療養所 悠久荘)
藤巻 誠	(高田西城病院)
若穂園 徹	(河渡病院)
砂山 徹	(村上精神病院)
坂井 正晴	(三島病院)
不破野誠一	(国立療養所犀潟 病院)
稲月まどか・松井 望	
伊藤 陽	(新潟大学精神科)

昨年我々はほぼ寛解状態にある17名の頻発型躁うつ病患者 (Rapid Cyclers: 以下 RC と略) の末梢甲状腺機能、TSH 基礎値、TRH 負荷試験の結果を報告した。今回は RC の症例を増やすとともに新たに患者群と性、年齢がある程度一致している正常対照群を設け、RC、non-RC 群と比較検討した。さらにこれら3群の血漿 TRH 様免疫活性 (以下 TRH-LI と略) を測定し比較検討した。また昨年報告した女性 RC 11名のその後の臨床経過を約1年間追跡調査した。

【結果】

RC 群19名 (女性14名, 男性5名), non-RC 群22名 (女性13名, 男性9名), 正常対照群19名 (女性14名, 男性5名) の3群の末梢甲状腺ホルモン、TSH 基礎値を比較すると、RC の T_3 は non-RC に比し有意に低かった。さらに RC の T_4 、フリー T_3 、フリー T_4 、リバーズ T_3 は non-RC、正常対照群と比較して有意に低値を示したが、TSH 基礎値はいずれの群間でも差は認められなかった。男女別に見てみると、女性 RC 群は前

記した結果と同様の傾向が認められたが、男性 RC 群は例数が少ないため統計学的評価は行えなかった。TRH-LI は RC 群ではその平均値が $12.1 \pm 4.3 \text{ pg/ml}$ 、non-RC 群で $9.5 \pm 3.7 \text{ pg/ml}$ と、両群間に有意差は認められなかったが正常対照群の $15.9 \pm 6.4 \text{ pg/ml}$ と比較すると RC、non-RC 群ともに有意に低値を示した。

昨年調査した14名の女性の RC の内、3名は追跡調査ができなかった。11名の女性 RC 中、カルバマゼピン (以下 CBZ と略) 単独投与で寛解状態のものが2名、炭酸リチウムを CBZ に変更後、軽快傾向にあるものが1名認められた。また昨年 TRH 負荷試験で過剰反応を示した2名の患者の内、1名は L-Thyroxine の持続投与で軽快傾向が認められた。

【考察】

過去の RC の研究では、その甲状腺機能の関連から、clinical あるいは subclinical hypothyroidism が重要な因子とされている。今回の我々の研究結果からも、RC に Hypothalamo-Pituitary-Thyroid axis (以下 HPT axis と略) の脆弱性が存在する可能性が示唆された。また以前より我々は RC に CBZ が有効であると考えているが、CBZ は HPT axis に影響を与えることが知られている。

以上のことから RC の病因には HPT axis が深く関わっていると考えられ、CBZ の効果もこの axis に関連している可能性がある。

16) プロモクリプチン投与が著効を示した周期性精神病の1例

松井 征二 (新潟大学精神科)
鈴木 健司 (山形県立鶴岡病院)

われわれは、10カ月間抗精神病薬投与に反応せず周期的病像を反復し、プロモクリプチンの投与により著明な改善をみた症例を経験したので、若干の考察を加えて報告する。

症例は22才の女性。17歳時に最初の病像がみられ、4年間の寛解状態の後、幻聴、被害妄想を伴う激しい精神運動興奮状態を呈して入院となった。

当初精神分裂病、緊張型と考え、ハロペリドール中心の薬物療法を施行した。幻聴、被害妄想は一過性で、多動、興奮特に脱抑制が目立った。入院18日目からほとんど反応無く1日中横臥し、食事摂取も不良な状態に急速に移行した。以降はそれぞれ2～3週間の興奮・多動期と亜昏迷期を交互に反復した。

無月経を伴い、治療効果みられないことからリーマス